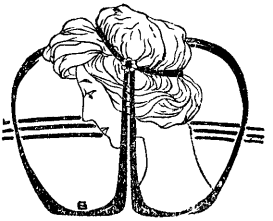

廬山の遠法師

河野法雲

支那佛敎史上に見逸してならぬ高僧大德は實に尠なからずと雖も、特に佛敎弘通の功蹟顯著にして而も人格の偉大なる點に就て云へば、先指を廬山の慧遠法師に屈せねばならぬと思ふ、その上、師は支那に於ける淨土敎の始祖として白蓮社を結び宗敎的團體の創始者なれば、其德化は遠く後世に及んで民衆の間に景仰せらるゝものなれば、今此人の性行と敎義の一班を叙べて見たいと思ふて、筆を採りました次第である。

一、慧遠の性行

慧遠法師は東晉の成帝咸和九年(日本仁德天皇二十二年)に生れ、同安帝義熙十二年(日本允恭天皇五年)に歿し八十三歳を一期として、其生涯は頗る光彩ある歷史を有する人なりき、俗姓は賈氏雁門樓煩の(今山西省中央代州附近)產である、幼にして學を好み十三歳の時舅令狐氏に隨て許洛に遊學す幾干もなくして六經に通じ最も老莊を善くす、資性聰明群衆に卓絕せり、年二十一にして江南に渡り

范甯宣子に就て學ばんとするに、此時中原大に亂れ江南地亦擾亂す、爲に南路梗塞して志を達すこと能はず、遇々沙門道安佛寺を太行の恒山に建て大に佛法の弘傳に勤む、其德化遠近に及び道俗の欽仰する所となる、是に於て慧遠は南行の志を轉じて恒山に往き道安に就かんとして、弟慧持と共に安公に謁す、一見敬慕の念を生し是眞に吾が師也とし、弟の慧持と共に弟子となる、道安の般若經を講ずるを聞て割然として開悟し歎じて曰く、儒道九流はみな糠秕のみと、遂に簪を投じて薙髮し專ら安公に就て業を受け苦精勵夜を以て晝に續ぎ佛法の振興を以て己が任とし暫時も懈る色なかりしが、悲いかな貧窶にして資なく、沙門曇翼之を憐み僅かに其燈燭の資を辨ずと云ふ、幾もなくして慧解大に進み道念愈々堅固なりしが衆に推れて遂に首座となりぬ、道安常に歎じて曰、大法をして東國に流れしむるものはそれ正に遠に在るかと、果せる哉其言に爽はず異日佛法大に振興し普天其德を仰ぐ乃ち羅什三藏は遠公を以て東方の護法菩薩と稱するに至る、年二十四にして方に經論を講說し衆の疑難を條析す、一日客あり實相の義を難す、往復時を移し難者未だ曉らず、遠公乃ち莊子の義を引て之を諭すに惑者曉然として退く、それより道安深く之を嘆稱して特に遠公にのみに俗典を繙くを許せり、後安に隨て南方襄陽に到り留ること十有餘年、時に僞秦建元九年歲四十、秦將符丕襄陽を攻て之を取る道安を抑留して洛陽に趣かしむ、安止むことを得ず學徒を散して四方に適かしむ、是に於遠公自ら徒衆數十人を率ひて南荆州に適き上明寺に住す、後羅浮山に往んと欲し潯陽に到るに、(今江西省の北端

揚子江の南）忽ち眼前に廬山屹立して其靜清秀靈なるを見て、是れ息心の所と爲し遂に意を決して廬山に入る、實に是東晉太元九年（日本仁德帝七十二年）のことにして遠公年五十一なりき、（佛祖通載佛祖統記に據る）然るに山中頗る水に乏し師乃ち杖を以て地を扣て曰、若此中棲止すべくば當に泉水を得せしめよと、言下忽ち清流涌出し後卒に溪を成す、其後潯陽元旱す遠公池側に詣り海龍王經を講ずるに忽ち巨蛇顯はれ池上より空に上り須臾にして大雨沛然として降る、亦大に年有り、依て寺を號して龍泉寺と云ふ時に沙門慧永、西林に在りて住す、永は元と道安に師事して遠と同門舊好あり共に止住す、是に於て慧永、刺史桓伊に謂て曰く、遠公は當に道を弘むべし今より徒屬の來集方に多かるべし、貧道の棲む所狹隘にして同住するに足らず此を奈何がせんと、桓乃ち遠の爲めに山東に於て房舍を立つ卽東林寺是なりこれぞ支那念佛道場の最初にして廬山念佛茲に胚胎す遠公是より三十年山を出でず毎に客を送り來るに虎溪を以て界とす、世に所謂虎溪の三笑なるものは此に起因す、又師の風丰は神韻嚴肅にして桓玄の如き震主の威を以て會見するに、覺へず敬禮を加ふ、又晉の安帝師を率て江陵より還る、途にして遠の候覲を勸むれども疾と稱し往かず、後に沙門王者不拜論を著して、袈裟は朝宗の服にあらず鉢盂は廊廟の器に非ず、沙門は塵外の人なり、應に王者を敬すべからずと、以て其心操の卓絕なるを知るに足る、既にして業儒有才の士期せずして四方より集るもの、彭城の劉程之、預章の雷之宗、雁門の周續之、新蔡の畢穎之、南陽宗張炳、張萊民、季碩等、又沙門にしては道生・曇順、僧叡、曇恒

並に佛馱耶舍、佛馱跋陀羅、等の諸高僧共に相次で廬山に入り遠公の會下に列す、遂に此等の道俗一百二十三人阿彌陀佛の像前に於て誓を立て淨業を修し淨土を願生す、卽廬山の白蓮社なるもの是なり劉程之、其誓願文を作る（願文載て梁僧傳第六樂邦文類二三十八丁に在り下に至りて知るべし）卽東晋孝武帝太元十一年丙戌七月（佛祖統記の說に據る）のことなりき、白蓮社の名は蓋し謝靈運の爲す所より此名起る、初め運、才を負ひ物に傲る遇々遠公に接し肅然として心服す爲めに二池を穿ち水を引て白蓮を栽へ入社を求むれども、遠公其心雜を以て此を許さず、又陶淵明、范寗を招て社に入らしめんとすれども彼等終に來らず、此の如く遠公同志と共に晨夕淨業を修して休まず初十一年中三度聖相を感ず然れども敢て之を人に語らず、後十九年を經て般若臺の東方に於て定より起て之を見るに阿彌陀佛の身虛空に遍滿して其圓光中に數多の佛佛あり、水流光明分れて十四流となる、皆空無我の音を演出す、卽佛告て曰、我本願力を以ての故に來て汝を安慰す、汝七日の後當に我國に生ずべしと、是より遠公疾に枕す報盡の到るを知りて遺誡を作て弟子にのこす、果して七日の後逝く春秋八十三、實に東晋安帝義熙十二年八月六日なりき、遺命して屍を松下に露し七日の後之を葬らしむ、門徒號慟父母を喪する如し、潯陽の太守阮侃全軀を奉じて西嶺に葬り塔を造る、謝靈運碑文を撰す、又宗張炳別に碑を寺門に建て、師の行德を表す、遠公曾て支那に律禪の備らざるを慨き弟子法淨法領等を西域に遣はして衆經を撩らしむ、彼數年の後梵本を賫し歸り皆支那に翻傳す、卽華嚴の梵本は法領に依て支那に傳り、後、佛

馱跋陀羅三藏譯して世に流布す、又遠は羅什の秦關に入るを聞て書を以て好を通じ、曇摩流支及羅什に請ふて十誦律を譯せしむ、此律の翻譯全成するは偏に遠公の力なり、又佛馱跋陀羅に禪經を譯出せしむ等のこと實に擧げて數ふべからず、故に後人心禪諸經は廬山より出ると嘆するに至る決して偶然に非るなり。

而して遠公歿後四百三十三年を經て、唐宣宗大中二年勅して辯覺大師と謚し、後又後唐の昇元三年改て正覺と追謚し、又宋の太宗太平興國三年勅して圓悟大師と追謚す、其德化後昆に及び、千載の後に至るまで遺風尙絕へず洵に盛なりと云ふべし、公の著す所の章疏歷代三寶記には十四部三十五卷ありと云ふ又諸經論諸序贊詩記凡十卷、廬山集と號す、宋朝元照律師之れが序を製し板行して紹興の府庫に藏すと云ふ、是をして今に存せしめば淨土敎研究の好資料なるも惜哉散逸して傳らずまことに遺憾なり、遠公の傳は梁高僧傳第六卷、佛祖統記第二十六卷、佛祖通載第八卷、歷代三寶記第七卷、樂邦文類第三卷、蓮宗寶鑒、戒珠往生傳、雲棲往生集、等の諸書に散見す披き見るべし。

二、其念佛義

東晉時代の社會上の大勢に促されて向上の目的を以て廬山に起る白蓮社の念佛は、何なる性質のものかは古來明確に此を示せるもの殆ど稀なり、故に之を研究することは頗る困難にして第一に之れが史料の缺乏すること是なり、先に云ふ如く遠公の著書は勘なからずと雖も今は已に幾んど亡逸して傳

らず、偶々羅什との問答を書きたる大乘法門大義なる者あれども是亦直接に淨土教に關する記事なし僅かに之れに關係あるものは梁僧傳や、樂邦文類中に載する念佛三昧の詩序一篇と、又劉程之の筆に成る蓮社の誓願文、及謝靈運の淨土詠、王喬之の念佛三昧の詩等、數篇に過ざるなり、其中念佛三昧の詩序は遠公が結社當時に、同志の士等の念佛に關する詩を集輯してそれに遠公自ら序を製したるものなれば、是こそ廬山一派の信仰を窺ふべき主たる材料と云はざるべからず、又白蓮社誓願文の如きも、彼念佛義を研究するには重要の史料なり、其他、蓮宗寶鑒等には白蓮社に關する記事あれども此書は遠公沒後年序遠く隔りて、宋朝の時に白蓮社が再興せられて、其頃に成りしものなれば餘り確實の史料とは爲し難し、たゞ傍ら參考に留め、主としては詩序及誓願文に依るの外なし又傍高僧傳等に顯れたる蓮社諸師の言行に鑑みて、聊か予の卑見を左に叙んとす、讀者幸に之を諒せよ。

抑も遠公の念佛三昧とは何なる意なるか、又白蓮社なるものは何を目的として結社されたかと云ふに、其目的は彼誓願文を讀めば自ら明白なれば今(劉程之の作)其文を抄錄せんに、

維歲、在攝提格、七月戊辰朔二十八日乙未、法師釋慧遠、貞感幽奧宿懷特發、乃延命同志息心貞信之士、百有二十三人、集於廬山之陰般若臺精舍、阿彌陀像前、率以香華敬薦而誓焉、惟斯一會之衆夫緣化之理既明、三世之傳顯矣、遷感之數既符、則善惡之報必矣、推交臂之潛淪、悟無常之期切、審三報之相催、知險趣之難拔、此其同志諸賢、所以夕惕霄勤、仰思攸濟者也、蓋神者可以感涉、而

不可迹求、必感之有物、則幽路咫尺、苟求之無生、則渺范何津、今幸以不謀而僉心西境、叩篇開信亮情天發、乃機象通於寢夢、忻歡百於子來、於是靈圖表暉、景侔神造、功由理諧、事非人運、茲實天啓其誠、冥運來萃者矣、可不尅心尅念重精疊思以凝其慮哉、然其景續參差功福不一、雖晨祈云同而夕歸攸隔、卽我師友之眷良可悲矣、是以慨焉肯命整衿法堂、等施一心亭懷幽極、誓茲同人俱遊絕域云云(已下略之)

此文に依りて見れば百二十三人の同志が倩々善惡應報無常迅速のことを思ふに就けても阿彌陀佛を念じ心を西方に注ひで尅念重精し共に誓て絕域の淨土に遊ばんと云ふに在り、已に文中僉心西境とあれ、他方の淨土や彌勒の淨土に非ずして、彌陀の淨土を願生する目的なること明なり、況や阿彌陀像前とあれば彌陀の念佛なること云ふまでもなし、而し其彌陀念佛が果して何なる種類のものでありたかは、此文のみでは判然し難い、是を以て念佛三昧詩序に就て之を見るの要あり、依て左に之を抄錄すれば、

念佛三昧何、思專想寂之謂、思專則志一不レ繞、想寂則氣虛神朗、氣虛則智恬其照、神朗則無二幽不一レ微、斯二乃是自在之玄符、會レ一而致レ用也、是故靖恭閑宇而感レ物、通レ靈御レ心、唯正動而入レ微、此假レ修以凝レ神積レ習以移レ性猶或若レ茲況夫尸居坐忘冥懷二至極一智落二宇宙一而闇蹈二大方一者哉請言二其始一菩薩初登二道位一甫窺二玄門一體寂無爲而無レ弗レ爲、及二其神變一也則令三修短葺二常度一、巨細互二相

逆、三光廻レ景以移レ照、天地卷而入レ懷矣、又諸三昧其名甚衆、功高易レ進念佛爲レ先、窮レ玄極レ寂尊號ニ如來一神體合變應レ不レ以レ方、故今入ニ斯定一者昧然忘レ知、即所緣以成レ鑒、々明內照交映色象生レ焉、非ニ耳目之所レ暨、而聞見行レ焉、(中略)是以奉誠、諸賢咸思ニ一揆之契一咸ニ寸陰之頹景一、懼ニ來儲之未レ積、於是洗ニ心法堂一整ニ衿清向一、夜分忘レ寢、夙霄惟勤、庶夫貞詣之功、以通ニ三乘之志一、臨レ津濟レ物、與ニ九流一而同往、仰援ニ超步一、拔ニ茀之興一、俯引ニ約進一、秉ニ策其後一、以觀ニ衆篇之揮翰一、豈徒文詠而已哉。

此に依れは念佛三昧とは畢竟心を一境に凝し、妄念亂想の心をして寂定空無ならしむるの意にし、諸の三昧は共に此意に外ならすと雖も、彼は特に念佛を以て寂定無二の境に體達する好方便となせり、故に支中『諸三昧中、功高易レ進念佛爲レ先、』と云へり、然るに其念佛に亦種々ありて、淸凉華嚴大疏鈔六十二卷二十九丁には五種の念佛を出す、一稱名往生念佛門、二觀像滅罪念佛門、三棋境唯心念佛門、四心境無碍念佛門、五緣起圓通念佛門なり、又圭峰行願品疏鈔四十八丁には、四種の念佛を列ねたり、一稱名念佛、二觀像念佛、三觀想念佛、四實想念佛なり、此中今遠公の念佛は果して何れに當るかと云ふに、或は觀想の念佛と云ふ說あり、或は觀像觀想兼有すると云ふ說あり、古來未だ必ずしも一定せず、予惟ふに廬山の念佛は、後世淨土敎の根元となるに相違なけれとも、後代の天台華嚴法相三論等と諸宗分立したる眼を以て彼を見、而も直に之は何種の念佛に屬すと云ふやうに判斷を下すべきもの

でないと思ふ、そは遠公の念佛には觀念あり稱念あり、事觀あり理觀あり、幾と所有る念佛の意義を含有し蘊在するものなれは、初より觀像觀想と限て、當てはめて論すべきものでないと思はる、然るに或論者は念佛三昧詩序、及蓮社誓願文を見るに、少しも稱名念佛の口吻なきを以て、直に速斷して彼は唯觀像觀想の念佛で稱名の意なしと爲す其證に彼文に於ニ無量壽佛像前一と云ふに非ずや、明に知ぬ彌陀の像前に對して沈思冥想を凝す觀念の念佛なることをと、是未た深く考へざる言のみ、何故なれは彼蓮社十八賢中の一人たる曇恒の傳を見るに、(佛祖統記第二十卷に出)自レ入ニ廬山一專志ニ淨業一端坐合掌厲聲念化而化』とあり、又同曇諦の傳にも、其に臨終即加趺念佛百聲閉息遂絶』と記したり、其他同門の道敬、道映、の傳中にも『端座唱佛而化』等の語あり、遠公の門下蓮社の一輩にして此の如くなれは、豈に廬山の念佛は毫も稱名の意なしと云ふべけんや、已に阿彌陀佛の像前に對して沈思冥想を凝し淨土を觀想する已上は、理として彼佛名を稱することなしとせんや、故に予輩は遠公の念佛をたゞ觀想のみと限るは不可なりと云ふものである、然らは彼念佛は漠然と何人とも名稱を附すべからざるかと云ふに、今假に其名稱を附すとすれは寧ろ事理雙修の念佛(法照禪師の五會讃に此名出づ)と云ふべきなり、其故は劉程之の誓願文に、於ニ阿彌陀像前一と云ひ、「而僉心西境叩レ篇開レ信」とあれは、これ事相的の念佛で、初めより寂照不二の理觀のみに非ること明なり、而るに其事相的の念佛が、やがて修練の功を積で三昧成就現前する時は、理に冥して寂照不二となる、此を彼詩序に入ニ斯定一者昧然忘レ知、即ニ所緣一以成レ鑒

鑒明則內照、亦映而色象生」焉」と云ふ、これ三昧成導し終て自在無二となりた相なり、されは彼念佛は事理の二面を具して、一面には行者の日夜佛前に於て觀稱念慮の功を積で專ら淨土を欣求する邊と又他面には此行業純熟すれば遂に無想離念寂照不二の境に體達する、これ初は有相、後は無相、又初は事にして後は理なり、之を事理雙修の念佛と云ふ、恐くは廬山の念佛は此の如きものに非る歟、尙識者の敎示を仰かんとするものなり、斯く見來れは彼念佛は固より善導流の稱名念佛に非す、又淨影天台等の唯心理觀の念佛とも稍々徑路を異にす、されは勢ひ五會讃に云ふ、所謂事理雙修の念佛に相當するものなりと云ふが予輩の意見なり、而し之を確かめんとするには尙進て遠公の念佛の由て來る系統を研究論述せざるべからず、今それを叙ふべき筈なれど餘り長ければ他日のことゝせん。

淨土詠

晉康樂謝靈運

法藏長王宮、懷道出國城、願言四十八、弘誓極郡生、淨土一何妙、來者皆菁英、頹言可尋、乘化必晨往

念佛三昧詩 四首今錄其二

晉琅琊王喬之

如用在茲、涉有覽無、神由昧徹、識以照麁、積微自引、因功本虛、泯彼三觀、忘此豪餘。

其二

寂寞何始、履玄通微、融然忘適、乃廓靈暉、心遊緬域、得不踐機、用之以沖、會之以希。

（樂邦文類第五卷出）